

「忘れられない本」

118J025 大山美来

小坂流加 『生きてさえいれば』 文芸社, 2018年

あなたは死んでしまいたいと思ったことがあるだろうか？人間関係で悩んでいる時、恥をかいた時、忙しい時、取り返しのつかないことをした時、会いたい人に会えない時…。理由は人それぞれだと思うが、誰しも一度は考えたことがあるのではないだろうか…。そんな時にこの本をぜひ読んでみてほしい。

この物語は千景(ちかげ)という自殺しようとした男の子が、ある一通の手紙を見つけるところから動き出す。千景の叔母・牧村春桜(はるか)が書いた手紙だ。宛名のない手紙を大切に手元に置いているのを見た千景は、病気で動けない春桜の代わりに手紙を届けに行く。2つの住所と「羽田秋葉」という名を手掛かりに。羽田秋葉という人が明らかになると同時に、春桜の過去も明らかになっていく…。これ以上は言えない…。この本が素晴らしすぎて言えない…。

ではどんなところが素晴らしいと思ったか紹介しよう。物語の内容も素晴らしいが、物語にちりばめられているアクセントが素晴らしい。1つ目は各章のタイトルだ。手紙、春夏秋冬、ブラックホール、12歳のポストマンなど…。その章のタイトルはこのタイトルしかないと思うほどぴったりなのだ。2つ目はタイトルにもあった春夏秋冬。春夏秋冬という言葉によって、人と人が繋がっていくというストーリーが個性的でとても面白い。例えば、「秋葉」という名前を知った瞬間にプロポーズする女子大生が果たしているだろうか？この本以上に春夏秋冬を小説に織り交ぜた作家はいないのではないかと思う。3つめは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』だ。『銀河鉄道の夜』という1冊の本を通じて春桜と秋葉の関係が進んでいく展開がとても素晴らしいと思う。また『銀河鉄道の夜』に出てくる”さいわいに至るためのおぼしめし”や”ほんとうの幸”という言葉が胸に響く。

作者小坂流加さんはこの本の編集が終わった直後、自身の病状が悪化し亡くなっている。最後の章には生きていればの後に様々な言葉が綴られる。「生きていれば、お腹もすく」、「生きていれば、人から感謝されることがある」。死を前にした作者にとって、生きることと結びついたことはすべてかけがえのないことだったのだろう。病と闘いながら、この本で伝えなかったメッセージ「生きていれば、“ほんとうの幸”を見つける旅が続けられる。季節を明日も巡りながら。春、夏、秋、冬、絶え間なく流れる幾千の景色の中で。」この言葉を私は一生忘れられないだろう。